

(別紙様式3)

令和2年3月30日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 埼玉県さいたま市浦和区高砂3-15-1
管理機関名 埼玉県教育委員会
代表者名 教育長 小松 弥生

令和元年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、
下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和元年5月17日（契約締結日）～令和2年3月31日

2 指定校名・類型

学校名 埼玉県立小川高等学校

学校長名 葺塚 雄一

類型 地域魅力化型

3 研究開発名

「おがわ学の構築・実践」学校と地域の未来を創ろう！プロジェクト

4 研究開発概要

県立小川高等学校の生徒と小川町の小中学校の児童生徒が、発達段階に応じて地域の文化や歴史、産業等を学び、地域へ参画し、地域課題の解決に取り組む学びである「おがわ学」を構築し、総合的な探究の時間や各教科の中で横断的に活用していく。

5 教育課程の特例の活用の有無

無

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
おがわ学推進協議会の企画・運営			○			○		○				○
おがわ学構想委員会の企画・運営			○		○			○			○	
おがわ学担当者会議（作業部会）の企画・運営				○	○	○	○	○	○	○	○	○
おがわ学運営指導委員会の企画・運営			○					○				○
先進地視察の企画・運営				○					○		○	
校内研修会の企画・運営							○		○	○	○	
関係各所の連絡・調整	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
生徒の活動支援				○			○			○		
補助金の管理、執行		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カリキュラム開発等専門家の配置			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ビジョンの共有			○	○	○	○						
内容の調査研究							○	○	○	○	○	○
探究的な学びの研究			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
取組の横展開の検討										○	○	○
高校の内容検討										○	○	○
小中学校の内容検討										○	○	○

(2) 実績の説明

ア 管理機関による事業の管理方法や地域において構築するコンソーシアムの構成地元の自治体、産業界、文化団体、地域住民等で構成する「おがわ学構想委員会」と指導・助言を行う「おがわ学推進協議会」からなる「おがわ学研究開発会議」（コンソーシアム）を組織している。

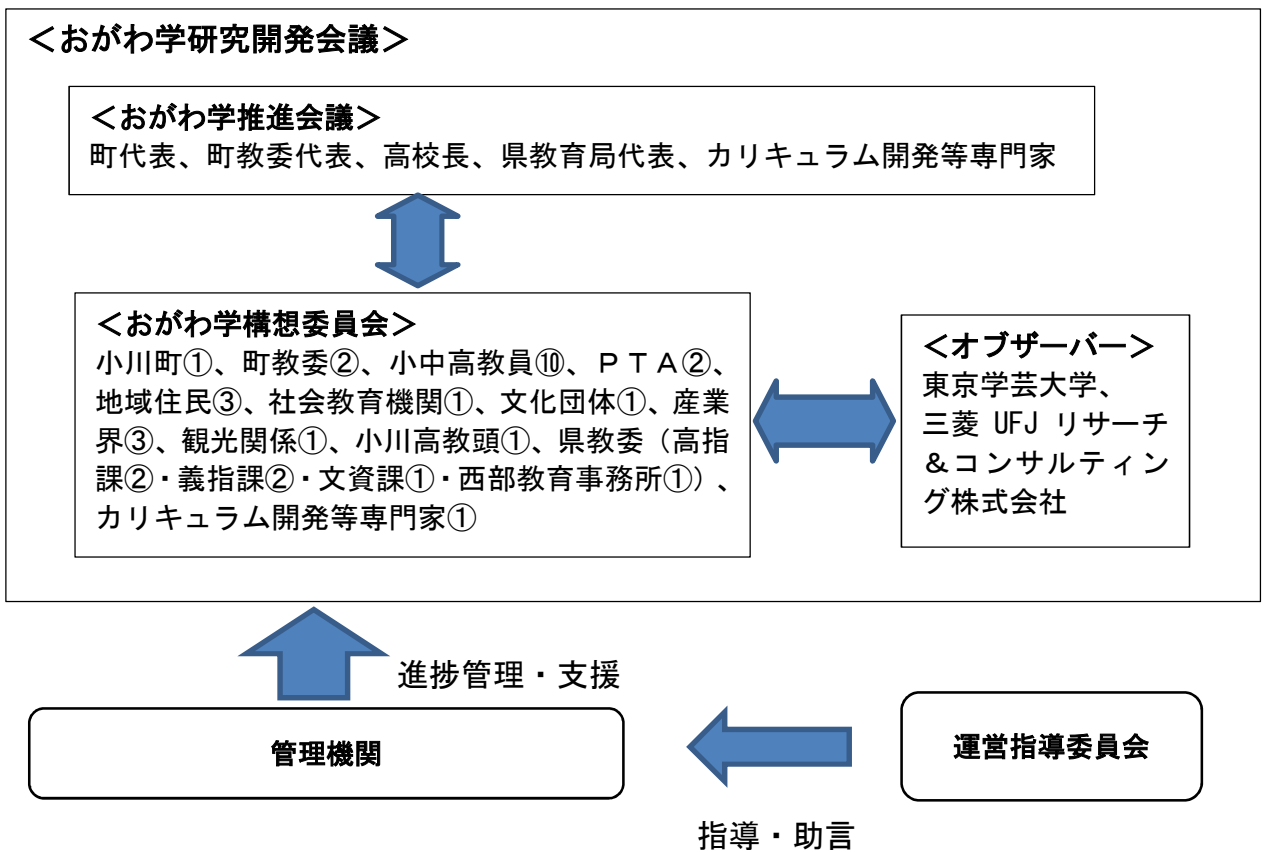
管理機関として、週1回小川高校、小川町、小川町教育委員会との打合せを行い、進捗管理及び支援を行っている。また、「おがわ学研究開発会議」の支援を行い、おがわ学推進協議会を4回、おがわ学構想委員会を4回、おがわ学構想委員会の作業部会である担当者会議を9回開催した。おがわ学運営指導委員会は、3回開催し、事業の

進捗についての指導助言を委員から頂いた。

コンソーシアムの構成メンバー

機関名	機関の代表者名
埼玉県教育委員会 高校教育指導課（教育課程担当2名） 義務教育指導課（教育指導担当2名） 西部教育事務所 文化資源課	教育長 小松弥生 教育指導幹 小出和重 指導主事 荻野あつみ 教育指導幹 吉田 元 指導主事 浅井大貴 指導主事 栗原智靖 指導主事 向井隆盛
小川町 政策推進課 小川町教育委員会（小中学校教員含む） 学校教育課 小川町立小学校6校 小川町立中学校3校 地域住民 P T A 社会教育機関	町長 松本恒夫 課長 矢島富男 教育長 小林和夫 課長 下村 治 指導主事 横山大輔 主幹教諭 篠崎和泉 教諭 島野修次 教諭 中山真理 教諭 馬場悦子 教諭 葛野かすみ 教諭 山下景子 教頭 佐藤毅一郎 教頭 田端隆二 教諭 納見政幸 東洋大学 教授 吉田善一 地元会社経営者 近藤嘉則 町区長会長 大沢輝夫 町P T A連合会（小中）幹事 内田恵司 高校P T A会長 金森美紀 町立図書館長 新田文子
埼玉県立小川高等学校	校長 葺塚雄一 教頭 堀口利樹 教諭 花輪恵
ホンダ・・・産業界 松岡醸造（町商工会会長）・・・産業界 有機農業生産グループ・・・産業界 細川紙技術者協会・・・文化 東武トップツアーズ・・・観光	ホンダ 圓山 昇 町商工会長 松岡 良治 有機農家関係者 佐藤 和美 細川和紙技術者協会 内村 久子 東武トップツアーズ 望月 康紀
コーディネーター	佐藤 夏子
※東京学芸大学	こども未来研究所 高橋 真生
※三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング 株式会社	主任研究員 阿部 剛志 副主任研究員 喜多下 悠貴

※はオブザーバーとして参画



イ カリキュラム開発等専門家、海外交流アドバイザー及び地域協働学習実施支援員の配置について

- ・カリキュラム開発等専門家は、埼玉県教育委員会の非常勤職員として週3日（21時間45分）小川高校で勤務。
- ・地域協働学習実施支援員は、埼玉県教育委員会の非常勤職員として週1日（7時間15分）小川高校で勤務。
- ・カリキュラム開発等専門家、地域協働実施支援員は同一人物として採用し、配置。

ウ 管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

- ・国費に上乗せした独自の支援や取組の実施
- ・継続的な取組を行うための教員の人事面における配慮
- ・構想委員会及び推進協議会の企画、運営
- ・運営指導委員会の企画、運営
- ・職員研修会の企画、運営
- ・町、町教委、高校との定例ミーティングの企画、調整、運営
- ・「おがわ学」先行実施科目の授業支援

エ 高等学校と地域の協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

- ・平成30年7月「小川町と小川高等学校との連携協力に関する包括協定を締結済

オ 事業終了後の自走を見据えた取組について

- ・先進校視察の実施及び先進校との意見交換、情報収集
- ・ファンドレイジングについての情報収集
- ・コミュニティ・スクールについての調査・研究

7 研究開発の実績

(1) 先行実施科目

おがわ学は初年度を構築の年とし、令和2年度から授業実践に入る計画だが、以下の3つの科目を先行実施科目として試行的に行った。

ア 学習活動の内容

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総合的な学習の時間「総合歴史研究」における小川町内での学習	6回	4回	10回	1回		4回				7回		
総合的な学習の時間「日本文化研究」における小川町内での学習	6回	4回	10回	1回		4回	4回					
総合的な学習の時間「くらしと科学」における小川町内での学習	6回	4回	10回	1回		4回	5回	8回	2回	3回		

○「総合歴史研究」

「高校3年間を過ごす小川町の歴史や文化を詳しく学び、小川町の良さを発見し、周囲の人たちにPRしていこう」をテーマに授業に取り組んだ。小川町について各自調査し、テーマを決め小川町新聞を作成した。それをもとに『小川町といえば』をテーマに小川町の魅力についてプレゼンを行った。そして、1年間のまとめとして、小川町の町案内パンフレットを作成した。作成したパンフレットは、町立図書館に展示するとともに、メディアにも取り上げられ広く活用できる内容であった。

授業の中では、小川町内のフィールドワークや和紙体験、地域のトップランナーからの講義など地域資源を活用し、実社会から学びの充実を図っていった。生徒が記入する振り返りシートでは、生徒自身の体験を言語化することや学びを深めるための整理を行うことを狙いとして取り組んだ。

生徒からは、「小川町の良いところをもっと見つけていきたい」「小川町のことをもっと知ってもらいたい」「第二の故郷になるぐらい愛着が湧いた」「小川町について知ることによって学びが多かった」などがあつた。来年度は、生徒の声がより一層深まる授業を目指していきたい。

○「日本文化研究」

小川町に関係の深い「万葉集」をテーマにみんなで学び、みんなでまとめ、みんなで疑問を出し合う授業を目指し取り組んだ。まずは、万葉集を中心に和歌・短歌など、古典文化に関する幅広い学習を行った。具体的な内容としては、生徒たちに「万葉集」が身近な場所と関係していることを実感してもらうため、万葉集に造詣の深い町立図書館長の話や町内の歌碑を巡るフィールドワークなどを行った。その後、生徒は、グループごとに「万葉集」に対して「わかったこと」、「疑問に思ったこと」についての整理を行った。そして整理した内容を全体で共有し、再度グループごとに対話を行

った。生徒からは、「これってどういうこと?」「どうしてなんだろう?」との発言があり、多くの「問い」が生まれた。最初は、「万葉集」に対して不安を感じていた生徒も他の生徒との対話を通して、学びを深めている姿が見られた。1年間の成果物として、自分で課題や疑問を見つけ、仮説を立て、それを検証するレポートの作成を行った。

○「くらしと科学」

和紙を中心に、身近なところに見られる現象がどのような仕組みで成り立っているか、背景にある考え方は何かを考察する授業を行った。

生徒は、和紙の原材料のミツマタ、コウゾ加工から和紙になるまでの作成工程を体験した。生徒一人一人が和紙体験学習センターの紙漉き職人と一緒に和紙の作成を行った。その後、漉いた和紙を和綴じとした。これらの体験をとおして、科学的視点から今後の和紙の可能性を考えるとともに、暮らしの中での和紙の活用について考える機会となった。また、小川町で和紙が発展した背景や文化等を紙漉き職人から直接学ぶ機会があり、生徒たちは、身近な課題を見つけることができた。

イ 指導方法と指導体制

- ・各授業とも、フィールドワークや外部講師、体験施設等の地域資源を活用した授業を行った。また、グループワークやインタビュー等、対話を重視した指導を行った。
- ・実体験を多く授業に取り入れ、地域の人的、物的資源を活用し、真正な学びの実現に努めた。
- ・振り返りシートを活用し、学んだことを整理するとともに、学びの深まりや学びの過程を生徒が認知するように取り組んだ。
- ・地域資源を活用した授業を行うにあたり、外部との調整については、地域協働実施支援員であるコーディネーターが行った。また、図書館のレファレンス機能の活用や校内委員会（地域連携委員会）を中心に教員間で連携をとりながら進めていく体制を整理し取り組むことができた。

ウ 学習の評価等

- ・「おがわ学」の目指す児童生徒像から、育成する資質・能力として、10の力を設定した。「おがわ学」の授業を通して、以下に示す10の力をもとに評価を行った。

つながろう小川 知る!学ぶ!!活かす!!!			
目指す 児童・生徒像	自ら課題を発見し、深く考え、主体的に判断することができる児童・生徒		
	小川町に対して愛着や誇りを持ち、小川町を含む地域に深く関われる児童・生徒		
	多様な人々と協働し、課題の解決に取り組むことができる児童・生徒		
育成する 資質・能力の3つの柱	知識及び技能	思考力,判断力,表現力等	学びに向かう力, 人間性等
	知る力	学ぶ力	活かす力
「おがわ学」で 育成する 10の力	【観察力】 物事の細部をじっくり見ることができる 【分析力】 資料等を客観的に読み解くことができる 【傾聴力】 他者の意見を謙虚に聞くことができる	【疑問力】 物事の課題に気づくことができる 【思考力】 筋道を立て整理しながら考え進めることができる 【判断力】 根拠を持って、物事の取捨選択を行うことができる 【表現力】 思考した結果を論理的に表現し、分かりやすく他者に伝えることができる	【行動力】 自身の考えに基づき、失敗を恐れず、粘り強く物事に取り組むことができる 【協働力】 多様な人々と、物事を円滑に進めることができる 【創造力】 課題解決の方法や納得解、新たな価値を作り出すことができる

- ・各授業の中では、「プレゼンテーションやポスター発表などの表現による評価」「討論や質疑の様子などの言語活動の記録による評価」「学習や活動の状況など観察記録による評価」「論文・報告書、レポート、ノート、作品などの制作物、それらを計画的に集積したポートフォリオによる評価」「課題設定や課題解決能力をみるような記述テストの結果による評価」「評価カードや学習記録などによる生徒の自己評価や相互評価」「保護者や地域社会の人々等による第三者評価」等を行い、生徒の学びの過程を多面的な視点から評価を行った。
- ・評価については、総括的評価を中心に行った。今後は、ルーブリックの設定、振り返りシート等を活用し、形成的評価を行っていくことが重要である。今後、どの場面で、どの方法で評価を行っていくか等を校内組織で検討していく必要がある。

エ 系統性・構造的性

小川町にゆかりのある史跡や文学、伝統技術などを、成立の背景から現在の活用方法までを系統立てて調べさせ、探究を重ね発表させる学習を試みた。それぞれの親和性の高い教科から教科担任を起用し、探究活動で得た知識や方法論を教科にフィードバックしながら積み重ねいくという構造である。

(2) 実績の説明

ア 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

地域資源を活用した探究的な学びについて、小学校から高等学校の各発達段階に応じた学習計画を構築するため、構想委員会を中心に学習指導計画の骨子について検討した。学習計画の詳細については、「産業・観光」「歴史・文化」「自然・環境」の3つの分科会に分かれ、校種を越えた話し合いの中で70を超える授業案を作成した。分科会の中で授業案を学習指導要領に照らし合わせながら並べ替え、さらに各分科会を越えて授業時数等との兼ね合いを確認しながら取捨選択を行った。

学習計画の骨子は、令和2年度以降に作成していくテキストの核となっている。人口減少等の地域課題は町のホームページで簡単に知ることができる。しかし実現可能な課題解決方法を探るのは容易ではない。豊かな自然を活用しながら産業を興し、かつては商都と呼ばれ活気づいていた小川町の過去と現在についての探究を積み上げることで、新たな可能性への気づきに繋げる、地域の未来を切り拓く深い学びが可能となるテキストの作成について検討している。

イ 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等）

「おがわ学」が、高校で一般的に扱われてきた地域学と大きく違うのは、地域資源を活用した取組を「総合的な探究の時間」のみならず、各教科で取り扱うことである。

したがって、教育資源の教材化とその検証、教科横断的な各教育課程編成、教員の探究的な学習に対する意欲と指導力の向上、新転任教員でも活用できるテキストの編纂等、多くの課題を克服する必要がある。

また、ここで培った能力の活用機会を「地域課題の解決」とするため、授業内での「町への提言」等の発表以外にも、教育課程内にとどまらない課題解決への意欲を生徒に持たせ、実際に地域行政や地域行事に参画させるなどの仕掛けが必要となってくる。

ウ 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各教科等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

高校内の地域連携委員会（校内委員会）では以下の示した教科横断の取組の素案を構築した。教科の組み合わせについては、今後さらに改良を重ねていく。各教科での該当内容の実施時期のすり合わせ等が課題となる。



エ 類型毎の趣旨に応じた取組について

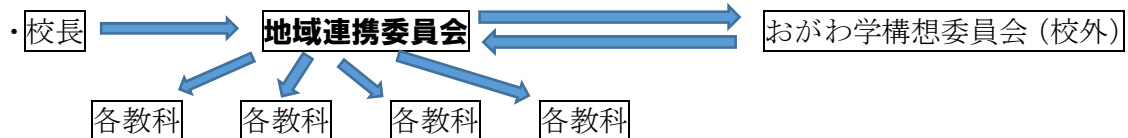
- 6月 リリック音楽祭に参画
- 7月 「まちづくり甲子園」（島根県立隠岐島前高校）参加
七夕祭りに参画
- 8月 「小川町まち・ひと・しごと創生総合戦略」
若者未来会議に参画（～12月）
- 9月 環境省による「地域循環共生圏講演会」
- 10月 町立図書館長出前講座
竹中工務店主催小川町SDGsツアー
- 11月 和紙づくり（楮ひき）・大判和紙の紙漉き
- 12月 和紙マラソンのメインMCとして参加
教員、生徒参加の高校魅力化アンケート研修会
- 1月 立教大学の地域創生関連ゼミ生との交流会
学校地域WIN-WINプロジェクトフォーラム参加
「おがわ学」生徒向け講演会（隠岐國学習センター センター長 豊田庄吾氏）

オ 成果の普及方法・実績について

上に示した各取組は、対象生徒が有志であるものがほとんどである。主体的に地域に関わっていこうとする生徒を増やしていくことが当事業の目的の1つでもある。そのため、教育課程内で全員参加を前提した取組と同時並行で、このように有志による取組を企画し生徒を参加させる、あるいは生徒に企画させる場面をさらに増やし、学校内の「地域魅力化」への意識を醸成していく。

(3) 研究開発の実施体制について

ア 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制



- ・「地域連携委員会」は教務部教育課程係、各教科代表及び管理職が指名した教諭で構成される。
- ・校内に組織されている他の委員会と同等の機能を持ち、職員会議への提案が可能である。
- ・「地域連携委員会」は「教育課程委員会」と密に連携し情報を共有する。

イ 学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

(ア) 地域連携委員会委員長を務める教師の主な業務

- ①各会議開催のための連絡調整
- ②各教科の地域連携ニーズの収集・情報把握
- ③地域連携に係る諸事業の円滑な実施に向けた校内体制の整備
- ④地域連携に係る諸事業を取り入れた教育課程の改善
- ⑤地域連携に係る諸事業についての校内外への情報発信

(イ) 支援体制

- ①持ち授業数の軽減
- ②担当分掌業務の軽減

ウ 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

- ・運営指導委員会（管理機関（埼玉県教育委員会）の下に組織）による指導・助言
立教大学教授 空閑 厚樹 氏
株式会社キャリアリンク代表取締役 若江 真紀 氏
島根県立高校教諭（島根県教育委員会から埼玉県立学校に派遣）竹田 育子 氏
西部教育事務所長 浅沼 俊英 氏
県企画財政部地域振興センター東松山事務所長 森 孝 氏
- ・おがわ学構想委員会に委員以外に以下の団体がオブザーバーとして参画、それぞれの専門的見地からアドバイスをもらった。

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社、東京学芸大学

エ カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

- ・構想委員会（コンソーシアム）では、「おがわ学」の構築、実践に向けて、小中高校が連携したカリキュラムづくりに取り組んだ。まず、作業部会である担当者会議からおがわ学の骨子についての案が提示され、協議を行い合意形成がなされた。

- ・構想委員会でのカリキュラム開発をするため、三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社による研修会を2回行った。

8 目標の進捗状況, 成果, 評価

- (1) 「横断的・総合的な学習を通して探究的な見方・考え方を働かせ、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を習得した生徒の割合」については、62.5%と前年度から約8%伸長している。目標の70%に対し、順調に推移していると言って良い。
- (2) 「生徒の意識と行動に係るアンケート調査の結果、「将来、自分の住んでいる地域のために役に立ちたいという気持ちがある」と肯定的な回答をした生徒の割合」については民間シンクタンクによる初の調査である。47.8%は高い数字ではないが、次年度から今年度計画した各種授業や取組が本格稼働することにより、目標の60%まで一気に押し上がることが期待できる。
- (3) 「各教科・総合的な探究の時間において「おがわ学」を活用した、年間の総授業数」については目標65回に対し55回。次年度からが本格的なスタートだが、先行実施している科目等により大まかな授業数が確認できた。ただし授業内容については、探究的な学びになっているかという点について改善が必要である。
- (4) 「コンソーシアム（おがわ学構想委員会）の活動回数」では、構想委員会4回と担当者会議9回により、目標を大きく上回ることができた。内容的にも計画的に進められたと言える。ただし、今後実際にテキストを作成していくにあたっては人員確保や時間の面で克服すべき課題が多い。

9 次年度以降の課題及び改善点

いかに各教科に探究的な学びを取り入れていくかと、そのワークシート及び資料（テキスト）の作成が次年度の最大の課題である。探究的な学びについては視察や職員研修等により、教える側のスキルと情熱を向上させるしかない。同時に生徒についてもさらに地域に出ていく場面を増やして地域課題への興味や探究的な学びへの意識を向上させ、相乗効果を目指す。ワークシート及び資料（テキスト）については執筆者、資料提供などの協力者などの人員確保と、執筆方針の検討である。構想委員会を中心にこれらの課題を解決し、令和2年度にはワークシート及び資料（テキスト）第1版を完成させる。

【担当者】

担当課	生涯学習推進課	TEL	048-830-6979
氏名	大平洋祐・岡本敏明	FAX	048-830-4964
職名	主任・指導主事	e-mail	a6975-05@pref.saitama.lg.jp